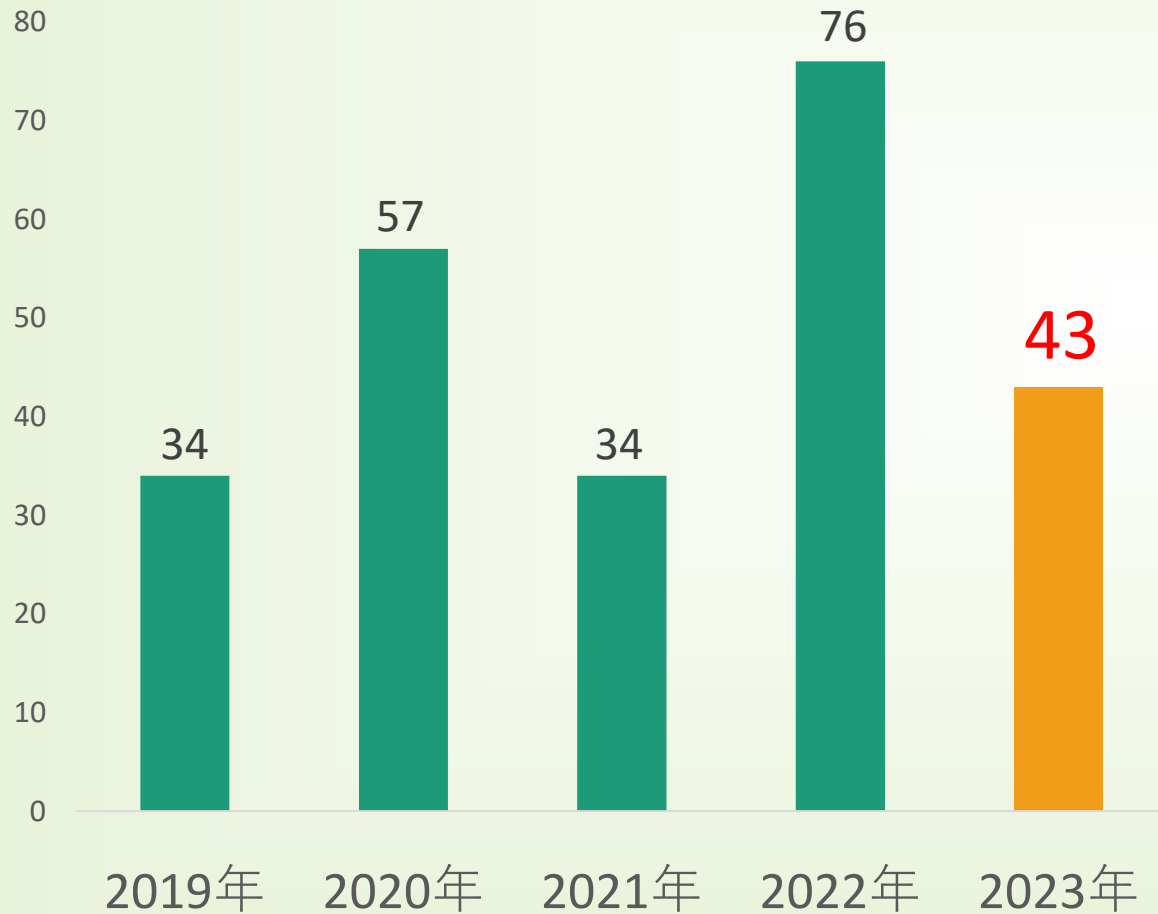


2023年（令和5年） 5月-9月
大阪府監察医事務所で取り扱った
熱中症死亡例の詳細について

大阪府監察医事務所

過去5年間の熱中症死亡者数

- 2023年5-9月に死因が熱中症であると診断された人は**43人**であった。



	5-9月総検案数	うち熱中症死亡数
2019年	1662	34
2020年	2027	57
2021年	2033	34
2022年	2282	76
2023年	2245	43

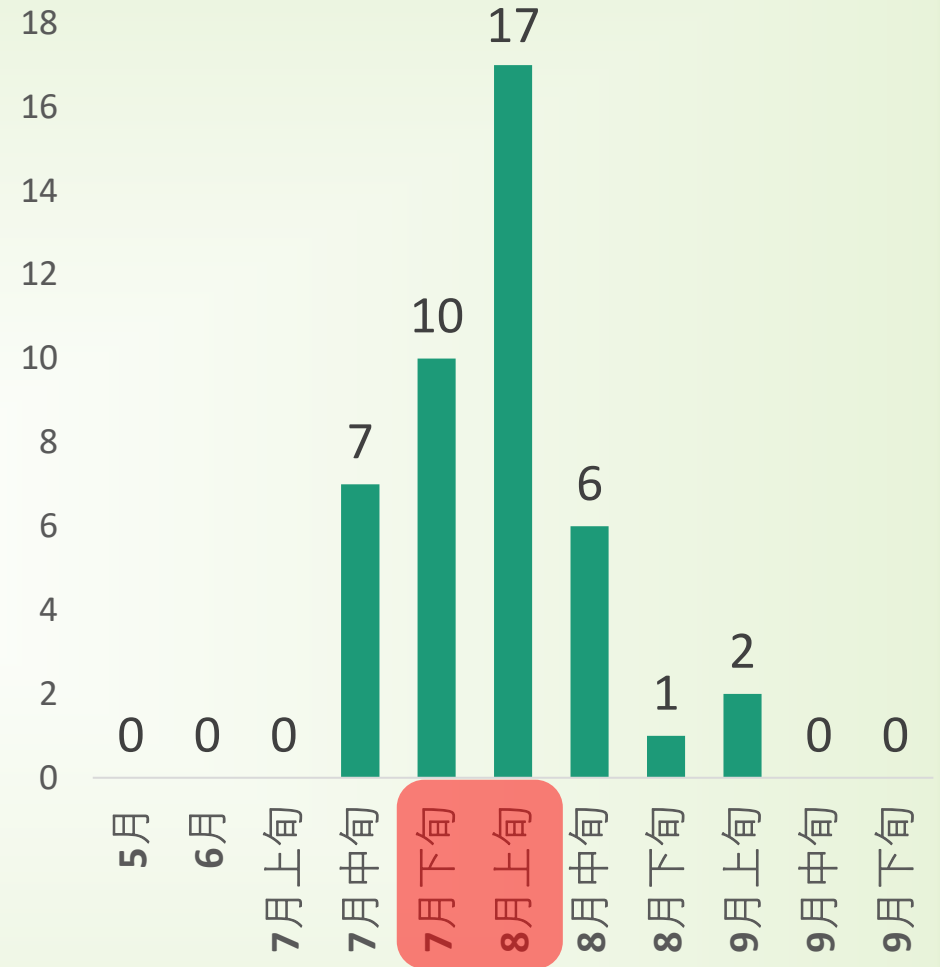
2023年 5-9月 月別熱中症死亡者数

- 2023年の熱中症死亡者発生のパークは
7月下旬から8月上旬にみられた。
- 例年、死亡者発生のパークは梅雨明け時期に大きく影響を受け、**梅雨明け後、約2~3週間**の間に熱中症死亡のパークが発生している。

2023年の近畿地方の梅雨明けは 7/20頃 (平年より1日遅い)

※1) であった。

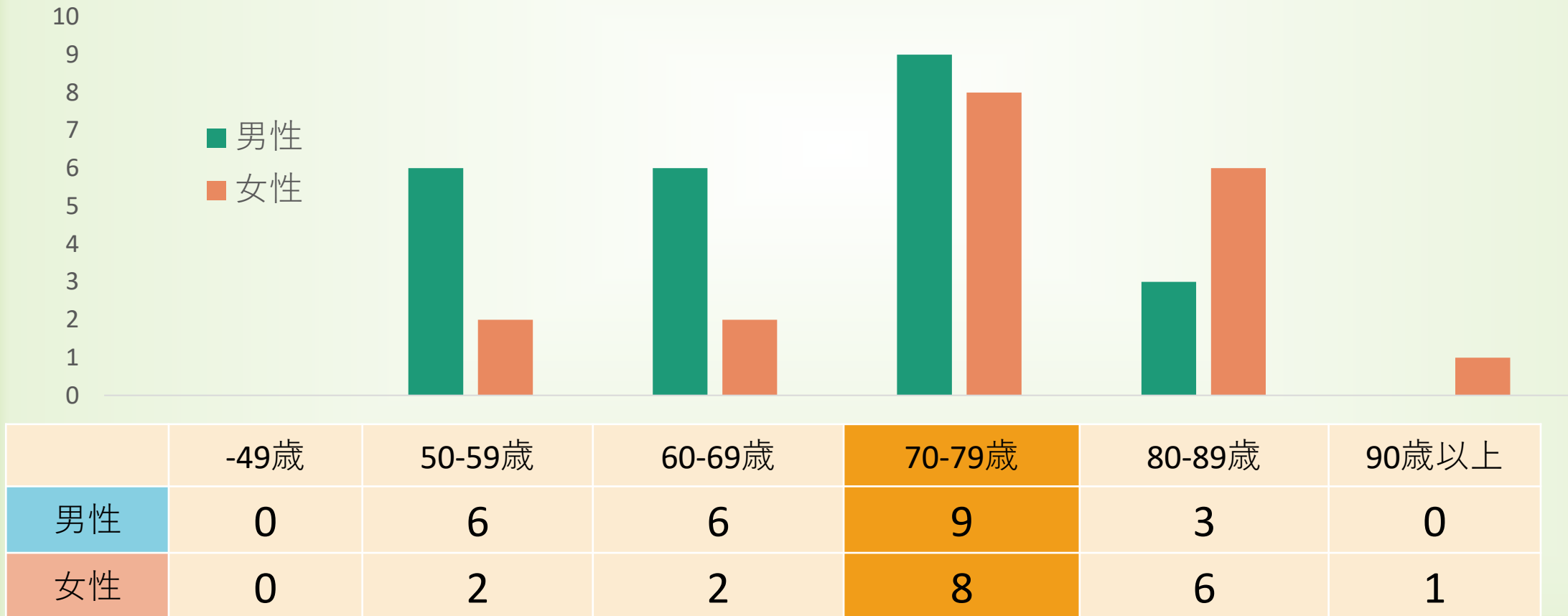
※1) 気象庁データより



梅雨明け後の2-3週間は最も意識をして熱中症対策を取るべき期間であると考え

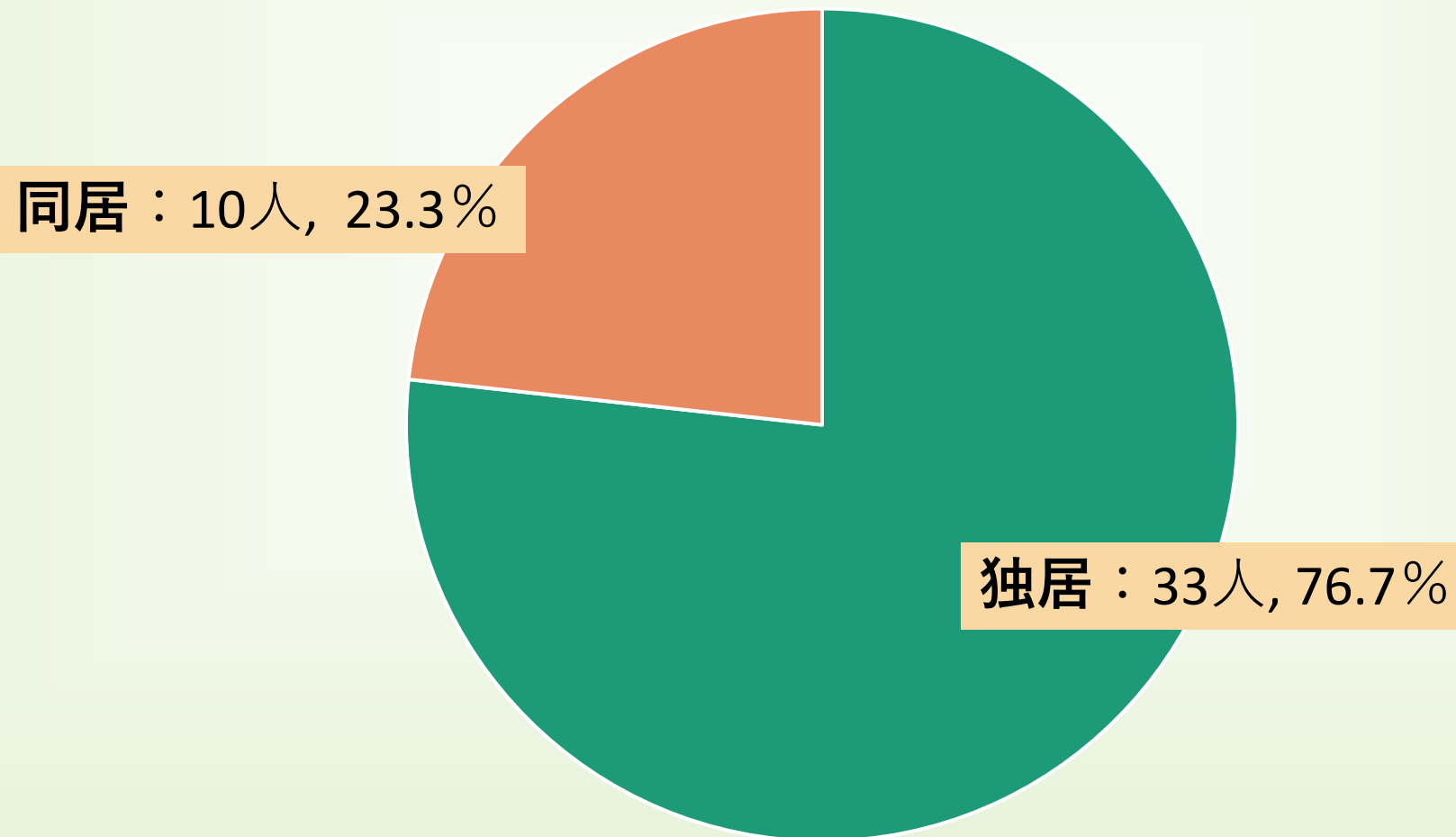
男女・年代別内訳

- 男女ともに70歳代の死亡者数が最も多かった。
- 65歳以上の高齢者が占める割合は
男性：**70.8** %、女性：**84.2** % であった。



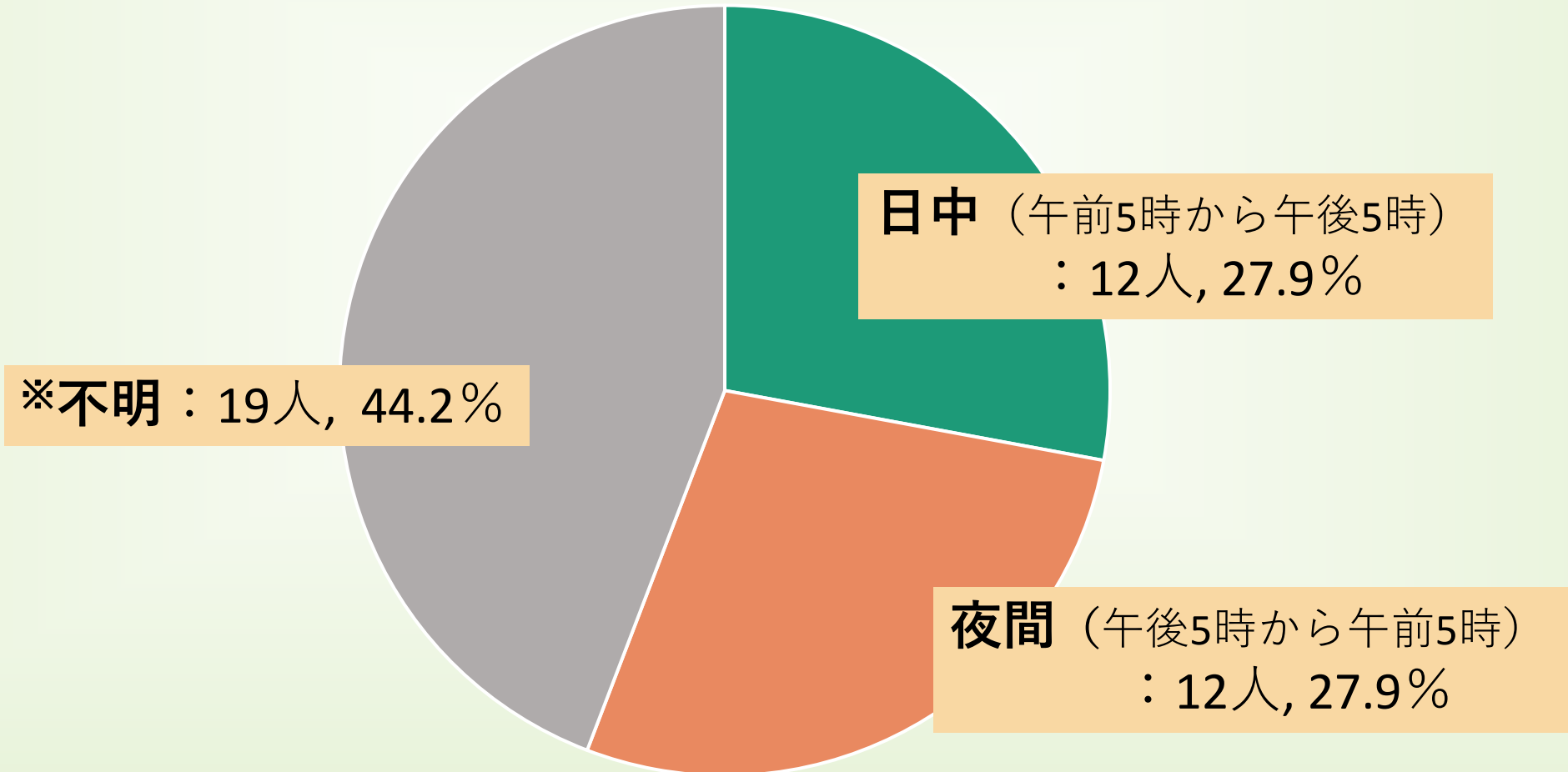
独居・同居（居住状況）の内訳

- 死亡者の約8割は独居者であったが、同居で見守りの体制があるケースでも死亡事例は発生している。



死亡時間帯の内訳

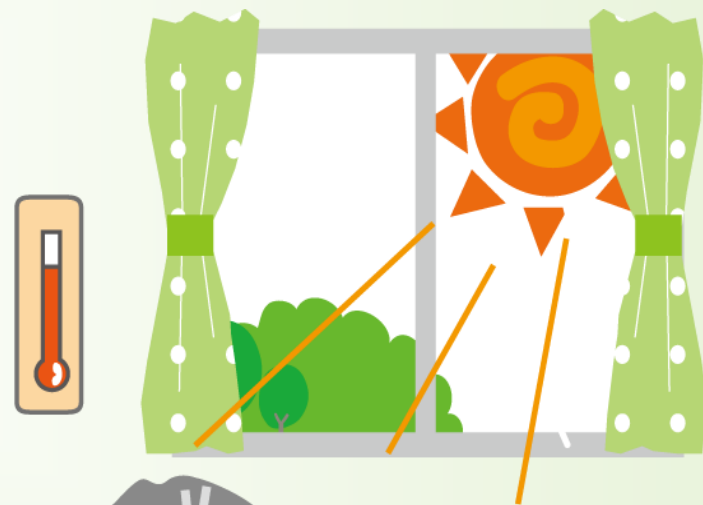
- 死亡時間帯は日中・夜間の割合が同じ割合で、不明が約4割を占めた。
(※夏期は死後変化も早く、死亡時間帯の推定が困難な例も多くなる。)



熱中症死亡者の普段の生活自立度

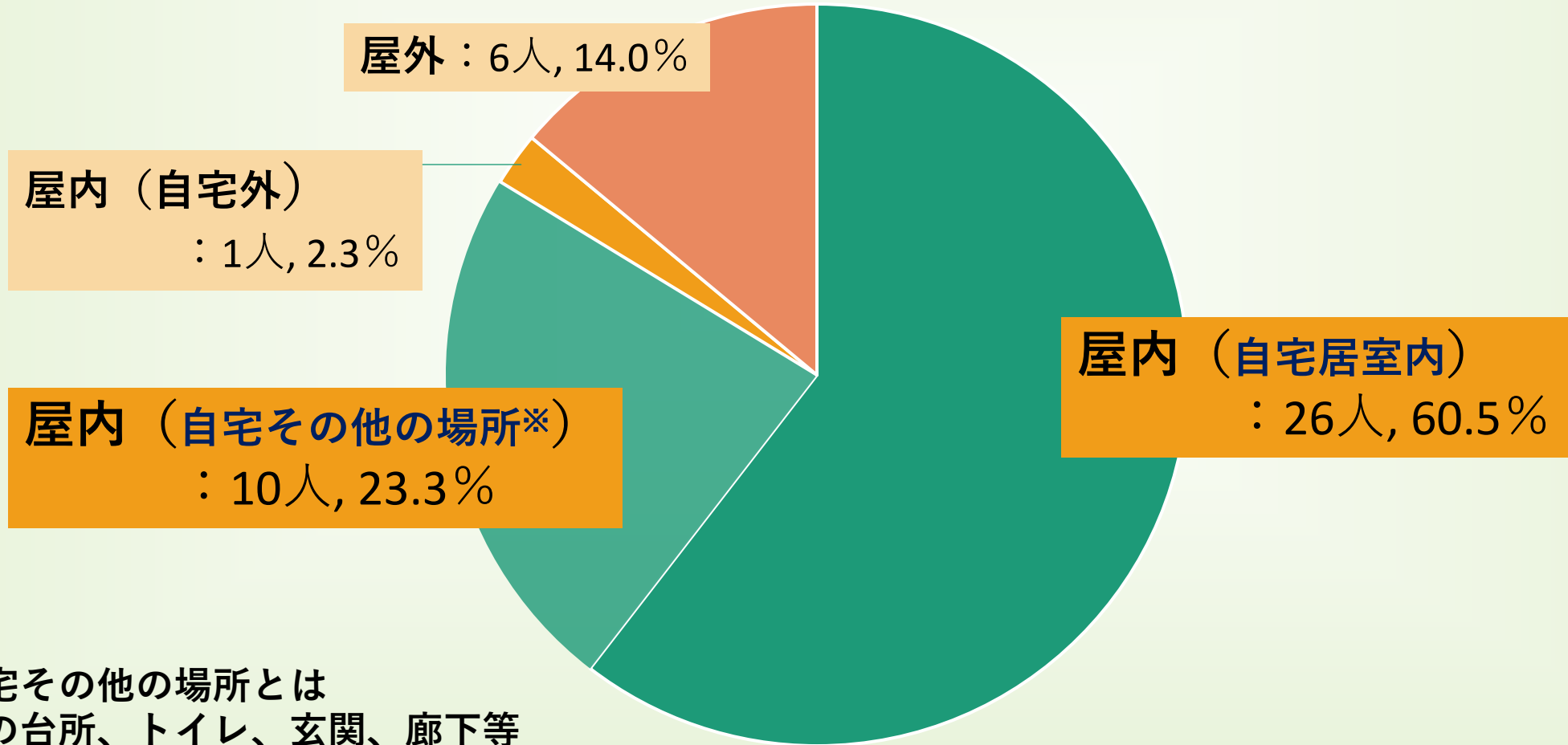
- 熱中症で死亡した人の多くは普段、自立した生活を送っていた。
- 介護度が高い方が特にハイリスクであるとはいえない。

身の回りの事が自分で出来る（自立）	36
多少の援助が必要	3
多くの場面で援助が必要	1
寝たきり	2
不明	1



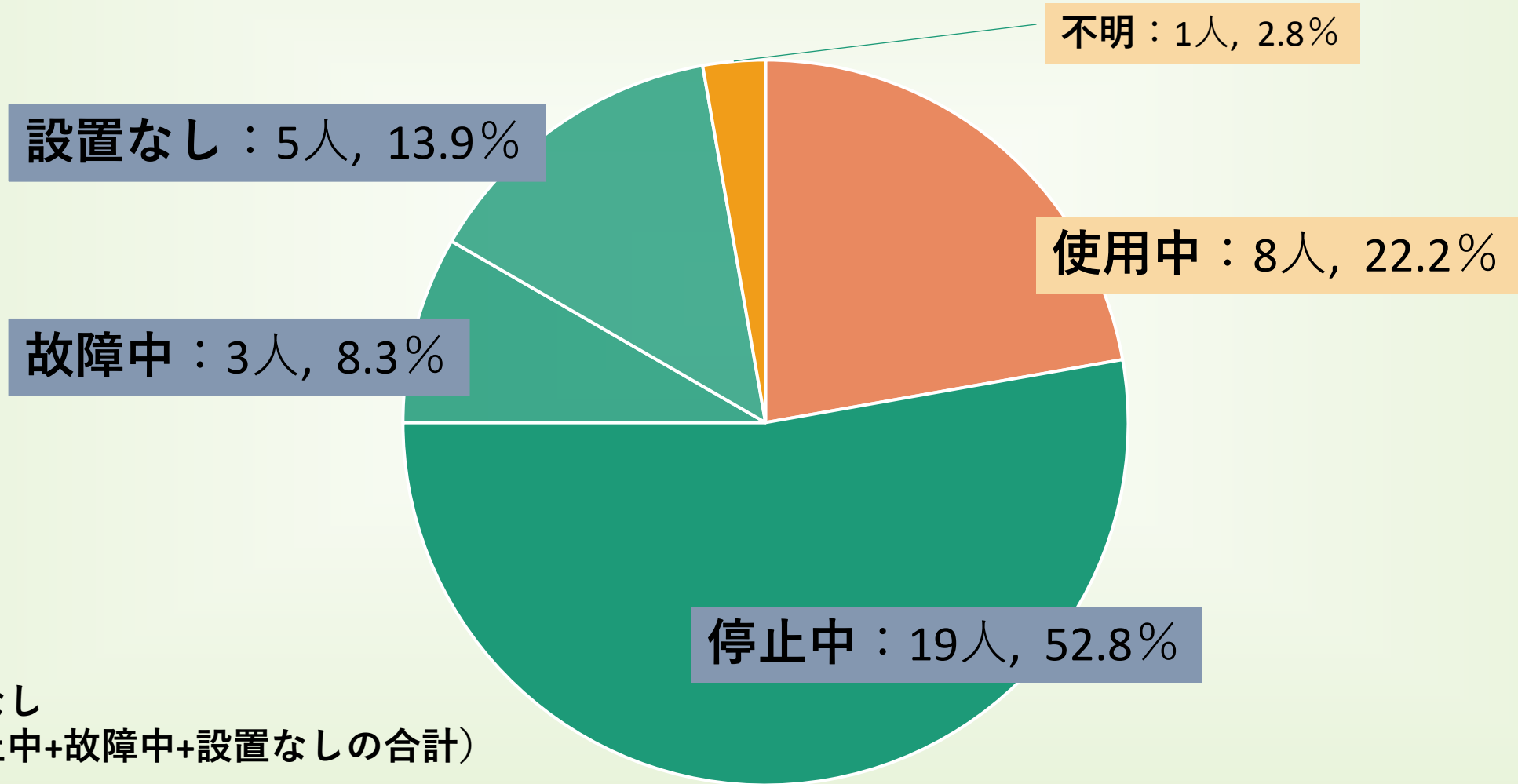
発症場所の内訳

- 発症場所の約8割が自宅屋内であり、そのうち居室内が多くを占める。



エアコンの使用（自宅発症例36例が対象）

- 死亡者の75%はエアコンを使用していなかった※。



※使用なし
(停止中+故障中+設置なしの合計)

エアコン使用なしにまつわるエピソードの有無

- 死亡時にエアコンを使用していなかった（停止中・故障中・設置なし）の27例について、エピソードがなかったか調査した。

エピソードあり	11
エピソードなし	6
不明	10

エアコンを使用しなかった理由
(できなかった)

- エアコンの風が嫌いだった
- 電気料金未納であった
- 節電・節約していた
- 日頃から決まった時間にエアコンを消す習慣があった
- 転居間近のため取り外していた
- リモコンが見当たらないため など

まとめ

- 2023年、大阪府監察医事務所で取り扱った熱中症死亡例は43例であった。
- 高齢者は熱中症死亡のリスクが高い！
- 普段自立した生活を送っている方でも熱中症を発症し、亡くなっている。
- エアコンの効果的な使い方に関する啓発をさらに進めなければならない。
- 高齢者ご自身に、『熱中症は誰にでも、いつでも起こりうる事』

という強い意識を持っていただき、

特に梅雨明け後の2-3週間の期間は重点的に熱中症対策を！